

月刊

2019

5  
月号

# みんぱく

月刊みんぱく  
のあゆみ  
五〇〇号



# 通巻五〇〇号の節目に

吉田 憲司

プロフィール  
1955年京都府生まれ。国立民族学博物館長。京都大学文学部卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。大阪大学助手、国立民族学博物館教授などを経て、2017年4月より現職。おもな著書に『文化の「発見」』（岩波書店）、『サントリー学芸賞』など委員、『仮面の世界をさぐる——アフリカとミュージアムの往還』（臨川書店）などがある。

『月刊みんぱく』が、通巻五〇〇号を迎える。一九七七年、みんぱくの開館の前月に第一号が刊行されて、四二年と七か月。この間、文字通り「毎月、みんぱくの動きとみんぱくにかかわる人びとの知見を社会に発信し続けてきたことになる。『月刊みんぱく』創刊にあたって、初代館長の梅樫忠夫は、「この施設を市民に身ぢかなものとしてしたしんでもらうために、できるかぎりの活発な広報努力をはらう」ことをめざして、この月刊誌を刊行するのだとしたためている。

私自身は、一九八七年六月、大阪大学文学部の助手からみんぱくの助手に転任し、まもなく編集委員会のメンバーとなった。一九九〇年の三月から五月にかけて開催した、みんぱくの第一回の企画展「赤道アフリカの仮面——秘められた森の精霊たち」を担当し、この展示をめぐる記事を『月刊みんぱく』にいくつも寄稿した。その展示を終えたのち、一九九〇年の夏からの一年間、私はロンドンの大英博物館民族誌部門（当時は、人類博物館という独立した建物もついていた）に客員研究員として赴くことになり、編集委員としての活動は休止状態となった。帰国後、一九九二年の一月号から六月号まで、大英博物館での経験について連載をした。編集委員会を離れることになった会合で、編集委員としては必ず

しも大きな貢献はできなかったが、執筆のほうでは、それなりのお役目を果たせたのではないかと語ったことを記憶している。

当時、私の文章も含めて、『月刊みんぱく』に掲載されたエッセイが、『週刊文春』誌上の上前淳一郎氏の連載コラム「読むクスリ」で取り上げられ、同タイトルの単行本にまとめられて刊行されることがしばしばみられた。この月刊誌が、その幅広い論調から、広くジャーナリズムや経済界にまで継続的な読者を獲得してきていることがうかがわれた。

類似の広報誌が各所から発行されるようになった現在でも、『月刊みんぱく』は広い層からの支持を得確かな存在感を示しているように思う。

目を現在の世界に転じると、地域や文化を超えた接触と交流が常態化する一方で、排他的で偏狭なナショナリズムが頭をもたげようとする動きも垣間見える。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えて、共に生きる世界の構築をめざすという文化人類学の知が、あらゆる分野で求められている。みんぱくと、みんぱくの築き上げる知を、分野を超えて伝える「広報誌」として、『月刊みんぱく』の果たすべき役割はますます大きくなっている。この月刊誌が、より多くの方々の目に触れ、多方面で活用していただけることを願っている。

## 月刊 みんぱく

5月号目次

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>通巻五〇〇号の節目に<br/>吉田 憲司</p> <p>2 <b>特集 月刊みんぱく 500号のあゆみ</b></p> <p>8 復活! 読者のページ Q&amp;A O</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/>みんぱくの顔『月刊みんぱく』</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/>Dr. みんぱく<br/>久保 正敏</p> | <p>16 新世紀ミュージアム<br/>ユニバーサル・ミュージアム<br/>広瀬 浩二郎</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/>劇映画のなかの万博<br/>——「家族」<br/>飯田 卓</p> <p>20 ながなんちゃ<br/>ながないんちゃ<br/>吉岡 乾</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

# 五〇〇号

## のあゆみ

『月刊みんぱく』は今号で通巻五〇〇号を迎えました。それを記念して本特集では、本誌五〇〇冊分の歴史を、一〇〇冊ずつ、五つの時代にわけて紹介したいと思います。

「ささやかなひとりの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにお届けするものである」。

これは、本誌創刊号に掲載された梅棹忠夫初代館長による「創刊のことは」のなかにある一文です。みんぱくの開館を一カ月後にひかえた一九七七年一月に、B5判、カラーの表紙に本文は黒と茶色の二色で印刷された二四ページの中綴じの小冊子として本誌は誕生しました。通巻五〇〇号を迎えた今日においても、その精神はまったく変わっていないといつてよいでしょう。しかし、この四〇年のあいだには、やはり紆余曲折があり、試行錯誤や製作体制の変化も経験しています。この機会に本誌の歴史を振り返ってみましょう。

### 一〇〇号（一九八六年一月号）まで フォーマット・編集体制の確立

創刊号の内容を見ると、先の「創刊のことは」に続き、梅棹館長がホストを務める「館長対談」が六ページにわたり掲載されています。第一回のゲストはSF作家の小松左京さんでした。そして、みんぱくの建物、館内の名所などを紹介し、進行中の展示作業をビビッドに伝えるページもあります。展示資料を紹介するコーナーでは「ベルシャのペン入れ」が取り上げられています。また、世界の博物館を紹介するページや、研究者がフィールドワークでの体験を綴ったエッセイのページ、読者の質問に答える「読者のページQ&A」。こうして見ると、その後、何年にもわたって踏襲される誌面構成がすでにできあがっていることがわかります。

さて、広報誌によって広くみんぱくが存在を知ってもらう。その目的を達成するため、大学や公共施設のほかに配布先として浮上したのがみんぱく友の会でした。友の会は開館に先立つ一九七七年五月に設立され、財団法人民族学振興会千里事務局（現・一般財団法人千里文化財団）によって運営されていました。本誌は友の会会員に毎月届けられることになり、また事務局により書店での販売ルートも確保されました。こうして、みんぱくの編集委員会が企画・編集し、民族学振興会千里事務局が製作と発行を担うという体制が整い、これは二〇〇四年のみんぱくの法人化まで継続されることになりました。

五二号（一九八二年一月号）から開始され、その後長期にわたる連載となつたのが、「民話の世界」です。江口一久助教授（当時）が自ら採集したアフリカの民話を再話し、版画家の田主誠さんのシルクスクリーンによる版画が誌面を飾りました。その後、執筆者、地域を変えながら一四八回まで回を重ねる人気シリーズとなりました。

### 二〇〇号（一九九四年五月号）まで

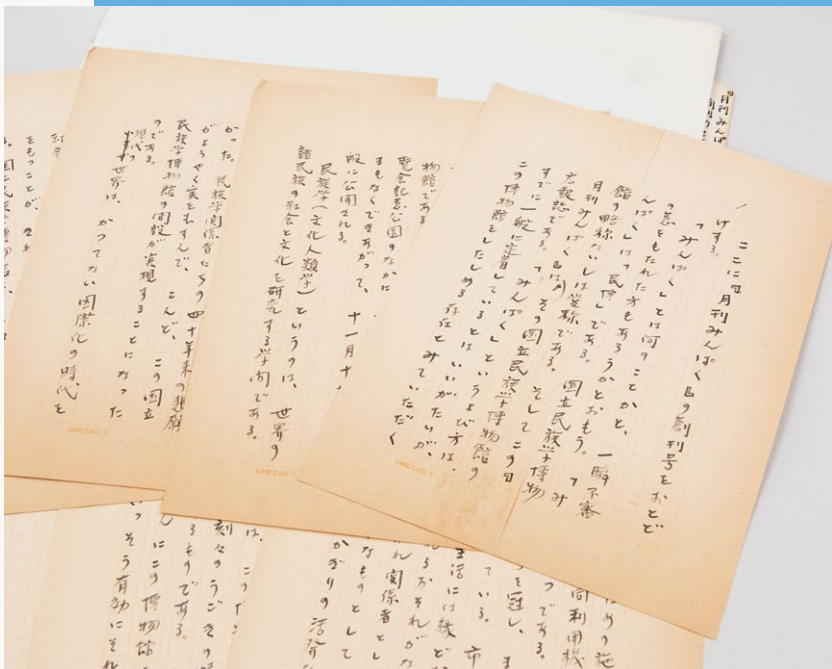
#### 「館長対談」から「みんぱく・いたびゅう」へ

巻頭の名物企画として人気を博した「館長対談」はどのようにして生まれ

年	本誌のあゆみ	みんぱく・世界の動き
1987	・第5代編集長に中牧弘允が就任（1987年4月号〜1989年12月号）	・開館10周年
1986	・創刊100号記念表紙展を開催（1月〜2月） ・1月号で通巻100号を迎える。 記念座談会「市民のための学術ジャーナリズムをめざして」を掲載	・大阪で日本万国博覧会が開催される
1985	・第4代編集長に小川了が就任（1985年4月号〜1987年3月号）	・本館開設 ・6月 初代館長に梅棹忠夫が就任（1993年3月）
1982	・第3代編集長に杉田繁治が就任（1982年8月号〜1985年3月号）	・本館開館（11月）
1981	・第2代編集長に小山修三が就任（1981年4月号〜1982年7月号）	
1980	・ワールド・エッセイの記事を収録した『民族学の旅』が出版される	
1978	・本誌から生まれた書籍第1号、『館長対談』を収録した『民博誕生』が出版される	
1977	・本誌編集委員会が発足（4月） ・初代編集長に石毛直道が就任（1977年10月号〜1981年3月号） ・本誌創刊（10月）	
1974		
1970		



上：創刊前後の会議資料。梅棹初代館長自身がファイルを作り、まとめて保管したものである。1〜3号の誌面構成も検討されている（「梅棹忠夫アーカイブズ」より）  
下：通巻2号の誌面とその指定紙。現在はパソコンで制作するが、2000年ごろまでは手作業も多かった



「創刊のことは」の手書き原稿（「梅棹忠夫アーカイブズ」より）

たのでしょうか。通巻一〇〇号を迎えた一九八六年一月号の歴代編集長の座談会で、初代編集長を務めた石毛直道助教(当時)がその経緯を語っています。「もし原稿をぜんぶ署名いりの手書きの原稿でうずめようとしたら、えらいことになる。ではどうしたらいいか。わりとうまく、書かずにページをうずめる方法は対談であろう。(笑)それで『館長対談』というのをかんがえた」のです。なんと、ページを手つ取り早く埋めるための苦肉の策だったのです。それが本誌を代表するコーナーになったのですから、おもしろいものです。

「館長対談」は当初はゲストに博物館関係者を迎えて、博物館の歴史や役割を縦横に語り合う内容でしたが、世界を舞台に活躍する研究者を迎えるシリーズへと変化し、最終的に対談集が一四冊も生み出されました。この間、一九八六年三月には梅棹館長が視力を失うという大きな危機もありましたが、梅棹館長が退任を迎えた一八六号(一九九三年三月号)まで継続されました。

編集委員会にとって、梅棹館長の退任後、「館長対談」の後の企画をどうするかが大きな悩みのタネでした。議論を重ねた結果、編集長が各界のかたがたに話を聞く「みんなく・いんたびゅう」に衣替えすることになりました。秋道智彌編集長を迎えた第一回のゲストは霊長類学者の河合雅雄さん、テーマは「ヒトの先祖は、なぜサルか」でした。「みんなく・いんたびゅう」の人選やテーマには歴代編集長の個性が色濃く反映され、読者にとってはそれが楽しみのひとつとなりました。

### 三〇〇号(二〇〇二年九月号)まで 社会との連携を深める

二〇〇年にわたり、大きなデザイン変更をせずに刊行されてきた本誌ですが、マンネリと言われる前に「うまくいっているうちに変えよう」という気運が生まれたのが一九九〇年代半ばの野村雅一編集長の時代です。通巻二〇〇号を迎えた一九九四年五月号に新企画「民族博物誌」が登場しました。生物多样性や地球環境問題に関心が高まるなかで、世界の諸民族が自然界とどのよ

うな関係を築いてきたのかを見直そうというものでした。この連載は八坂書房より『世界民族博物誌』として出版されています。

一九九九年四月、通巻二五九号を迎えた本誌は、栗本英世編集長のもと、大きな試みをおこないます。タイトルロゴとともに表紙デザインを大きく変えたのです。それまでの表紙はロゴをはさんで上下に四角い写真スペースがあり、そこに資料の一部分を拡大した写真を配置するというもので、少し重々しい印象がありました。新しい表紙では、軽やかな動きのあるロゴに改められ、資料の写真も切り抜き画像を使った明るいイメージになりました。誌面デザインも変更され、見出しなどに使われていた茶色も明るい茶色になりました。

また、この号から、世界の名作文学(名画・名曲)を民族学者が読む(見る・聞く)とどうなるか、というコンセプトで生まれた「よむ・みる・きく」のコーナーが始まりました。第一回で取り上げられたのは『ピノッキオの冒険』、野村雅一教授(当時)が執筆し、絵本作家の岡島礼子さんが挿絵を担当しました。こうして本誌は果敢に挑戦をしてきたわけですが、二〇〇〇年前後というのは大学や博物館が広く社会に開かれた組織であることが求められ、蓄積した情報を積極的に社会に還元するべく動き始めた時代でもありました。小・中学校、高校では、地域や学校の特色に応じた学習などを実施するという「総合的な学習の時間」が始まります。そして本誌にも「博学連携」「社会連携」をキーワードとした記事が掲載されるようになります。小長谷有紀編集長の時代には「総合的な学習の時間」の柱とされる「環境」「国際理解」「福祉・健康」「情報」をテーマにしたインタビューがおこなわれ、またみんなくを学校教育の現場でも広く利用してもらえるように、本誌の配布先も関西圏の小・中学校にまで広がられました。

さらにこの時期は、災害への向き合い方をみんなくが見つめ直すひとつの契機となったといってもよいかもしれません。一九九五年の阪神・淡路大震災ののち、災害時にみんなくが果たすべき役割や復興支援のあり方を模索する記事は現在に至るまで掲載され続けています。

年	本誌のあゆみ	みんなく・世界の動き
1989	・第6代編集長に秋道智彌が就任 (1990年1月号〜1994年4月号)	・第1回特別展「大アンデス文明展——よみがえる太陽の帝国インカ」を開催
1992	・3月号にて「館長対談」コーナー(全182回)終了	・国連地球サミットが開催される
1993	・第7代編集長に野村雅一が就任 (1994年5月号〜1998年12月号) ・5月号で通巻200号を迎える	・4月 第2代館長に佐々木高明が就任(〜1997年3月) ・アオウミガメ
1994		・阪神・淡路大震災発生(1月) ・本館ホームページを開設(12月)
1995	・読者のページQ&Aを収録した「100問100答世界の民族」が出版される	
1996	・開館・創刊20周年につき、「民博とわたし」というテーマで読者から原稿を募集。4月号〜1998年3月号の「読者のページQ&A」欄で随時掲載	・開館20周年 ・4月 第3代館長に石毛直道が就任(〜2003年3月)
1997	・開館20周年につき、「あなたからのメッセージ」展にて、「月刊みんなく」版画展「文化に映った動植物」を公開(5月〜6月)	・みんなく電子ガイドおよび学習コーナーを一般公開(5月)
1999	・第8代編集長に栗本英世が就任 (1999年1月号〜2000年3月号) ・4月号よりロゴを変更 	・「冒険は小道からはじまる」  「よむ・みる・きく」初回(1999年4月号)が
2000	・第9代編集長に小長谷有紀が就任 (2000年4月号〜2002年3月号)	・「総合的な学習の時間」が導入される
2002	・第10代編集長に印東道子が就任 (2002年4月号〜2004年3月号) ・本誌音訳版の作成が開始 ・9月号で通巻300号を迎える	・学習キット「みんなつく」貸出開始(9月)  広瀬浩二准教授の発案で、本誌は視覚障害者もつ方に向けて音訳版を作成している。当初はカセットに録音されていた
2003	・「民族博物誌」が収録された『世界民族博物誌』が出版される ・第11代編集長に野村雅一が就任 (2004年4月号〜6月号) ・4月号より全面リニューアル。 ・発行元がみんなく、発行日が5日から15日になった ・第12代編集長に長野泰彦が就任 (2004年7月号〜2005年3月号) ・「表紙写真の説明」が収録された『世界民族モノ図鑑』が出版される	・4月 第4代館長に松園万亀雄が就任(〜2009年3月) ・国立大学法人法の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足(4月)
2004		 2004年4月号ロゴ

四〇〇号（二〇一一年一月号）まで  
法人化の影響

そして迎えた二〇〇四年、国立大学の法人化の動きのなかで、みんなはくは大学共同利用機関から大学共同利用機関法人・人間文化研究機構を構成する一機関となりました。このときの本誌の変化は『月刊みんなはく』史上最大のものといえるでしょう。大きな変化を目前に、再度編集長に就任した野村雅一教授（当時）は、「徹底的に全部変える」と決意をかため、誌面の全面リニューアルに取りかかります。ロゴ、表紙デザインにはじまり、誌面構成そして製作体制や発行元に至る大がかりなものとなりました。雑誌『is』（ポララ文化研究所）の名編集長として知られた山内直樹さんをアドバイザーに迎え、みんなはく発行の第一号として生まれたのが三一九号となる二〇〇四年四月号です。表紙に標本資料以外のものがデザインされたのは、このときの「太陽の塔」が初めてです。それまで二色刷だった誌面にカラーページができ、メインのコーナーは、対談・インタビュー形式から特集形式に変わりました。折々の話題を複数の記事から多角的に紹介することができるのが特集形式の強みです。特別展・企画展の紹介はもちろん、二〇一七年に完了した全面改修後の本館展示の見どころについても、展示場ごとに公開時期に合わせて特集を組んできました。八杉佳穂編集長の時代には、「飲む」「呪う」「産む」など、動詞から世界の文化を切り取るというユニークな企画もありましたし、毎年恒例となった一月号の干支シリーズも、この特集形式を最大限に活かしたものと見えるでしょう。

法人化以降の新しいコーナーには三四三号（二〇〇六年四月号）からの「外国人として生きる」というものがあります。これはさまざまな境遇のなかで前向きに生きる、身近に住む外国人の存在に目を向けた連載です。このコーナーが誕生した背景には、日本社会の変化があげられるでしょう。グローバル化が進み、日本に暮らす外国人が増加し、多文化共生という課題が浮上してきたのです。その後、本コーナーは「多文化をささえる人びと」へと引き継がれ、四二一号（二〇一一年二月号）まで長く続きました。

法人化という出来事は、みんなはくのアイデンティティを問い直すものでした。本誌も根本からそのあり方を問われ、隔月刊にする、無料化してホームページに掲載するなどの意見があり、ときに存続をめぐる議論もなされました。そして、製作体制についても不安定な時期がしばらく続くことになったのです。

そして五〇〇号を迎えた  
基礎をかためる

そんな本誌も、現在は荒波を乗り越えて、ようやく安定期に入ったといえるかもしれません。現在のスタイルが生まれた二〇一〇年は、久保正敏編集長のもと、法人化の影響で揺らいだ製作体制がようやく安定し、あらためて一般読者向けの広報誌として内容を見直した年でした。

まずは表紙のデザインから見直しましょう。法人化直後、一旦は標本資料から離れた本誌の表紙デザインですが、二〇〇五年四月の三三三一号からは、表紙を飾ったモノを紹介するコーナー「表紙モノ語り」の誕生が示すように、再び標本資料へと回帰していききました。しかし、「世界の文化を紹介するにはモノだけでなく、その背景をも紹介する必要がある」と考えた久保編集長は、みんなはくの誇る資料を大切にしつつも、文化的背景をあらわす写真などもデザインに取り入れるという自由な発想に転換しました。

そして現在のロゴは、デザイナーによって「オースドックスな明朝体がむしろ新鮮に映るのではないか」と提案されたものです。製作体制を立て直し、本誌で発信すべきことを再度見直した時代を、「原点回帰」をイメージしたというストレートなロゴがあらわしています。こうして二〇一〇年七月の三九四号から現在に続くスタイルが誕生したのです。

本誌の根底に流れるものは、冒頭でも述べたとおり、みんなはくの魅力や民族学・人類学のおもしろさをみなさんに紹介したいという強い思いです。本誌は今後も伝統を守りつつも挑戦する心を失わずに、みなさんに愛される雑誌を目指していきたいと思えます。（本誌編集室 小山茂樹、近田さやか）

年	本誌のあゆみ	みんなはく・世界の動き
2019	・通巻500号記念号（本号）を刊行	
2018	・音訳版を本館ホームページにて公開	
2017	・第18代編集長に丹羽典生が就任（2017年1月号〜）	・開館40周年 ・本館展示の全面改修が完了（3月） ・4月 第6代館長に吉田憲司が就任
2016	・『月刊みんなはく40巻総索引』を刊行（12月）	
2015	・4月号より本文を24ページから20ページに変更	
2013	・第17代編集長に山中由里子が就任（2013年4月号〜2016年12月号）	
2012	・『生き物博物誌』が収録された「食べられる生きものたち 世界の民族と食文化48」が出版される	
2011	・1月号で通巻400号を迎える ・第16代編集長に庄司博史が就任（2011年8月号〜2013年3月号）	・東日本大震災発生（3月）
2010	・7月号よりロゴを変更 ・10月号に「創刊のことば」を再録（特集「梅樺忠夫とみんなはく」）	 <p>2017年7月号ロゴ 現在のロゴは「みんなはく」ということばがもつやわらかい語感を表現している</p>
2009	 <p>2009年4月号ロゴ</p>	・4月 第5代館長に須藤健一が就任（2017年3月）
2008	・第15代編集長に久保正敏が就任（2008年4月号〜2011年7月号） ・4月号よりロゴを変更	・2008年度より本館展示の全面改修を開始。展示キャプション等に英語表記が加わる
2007		・開館30周年
2006	<ul style="list-style-type: none"> <li>この年から毎年1月号に干支に関連した特集が掲載される（2017年1月号。番外編2018年1月号「ねこ猫ネコ」）</li> <li>第14代編集長に池谷和信が就任（2006年4月号〜2008年3月号）</li> <li>4月号よりロゴを変更</li> <li>30巻記念号として12月号を刊行、記念座談会「月刊みんなはく」の過去・現在、そして未来、「月刊みんなはく」30巻総索引」を掲載</li> <li>開館30周年記念イベントとして、『月刊みんなはく』350冊展の巡回がスタート（12月）（大阪、神戸、広島、仙台を巡回）</li> </ul>	 <p>2006年4月号ロゴ</p>  <p>2005年4月号ロゴ</p> <p>「外国人として生きる」初回（2006年4月号）</p>
2005	<ul style="list-style-type: none"> <li>第13代編集長に八杉佳穂が就任（2005年4月号〜2006年3月号）</li> <li>4月号よりロゴを変更。発行日が15日から1日になった</li> </ul>	

# Q & A O

創刊から2004年まで続き、梅棹初代館長が民博の館員と読者との「格闘の場」とも例えた人気のコーナーに「読者のページQ&A O」があった。じつはこんなところにも小さな歴史があるのだが、当初は「読者のページQ&A」として始まったこのコーナー、読者の質問だけでなく意見や感想も掲載できるよう、1978年10月号からはコーナー名に「O(オピニオン)」が加えられた。今号では通巻500号を記念して、来館者から寄せられた質問・意見に回答したい。

**Q** 展示場が広く、資料も豊富で、ジャングルに迷い込んだような気分になりました。見応えがありすぎて一日では展示を見きれないので、おすすめの順路や資料があれば教えてください。

**A** 本館展示の順路は、世界を東回り一周する民族文化の旅ができるようになっており、距離にすると約五キロメートルにもなります。本館が専門とする民族学・文化人類学では、世界の民族の文化をひとしく研究していますので、特定の地域の資料だけを取り上げて「おすすめする」とことは難しいのですが、時間がないときには、「順路にこだわらず、どこからでも自由に観覧できる」という回遊式の本館展示の特徴を活かし、自分だけのオリジナルの順路を決めて見学してはいかがでしょうか。順路設定の参考に、全面改修後の展

ままにしています。では、現地の人びとは強烈な匂いのテントのなかで暮らしているのでしょうか。本来、乾燥地帯では匂いが弱くなります。ですので、現地ではそれほど強烈な匂いはいしません。その資料がどこで使用されていたものなのか、その背景も想像してみるといいですね。(民博 上羽陽子)

**Q** 展示資料のなかには、みんぱくの教員が自分で作ったものもあると聞いたのですが、資料の収集はどのようにおこなっているのですか。

**A** 確かに民博の資料には研究者自身が制作したものがあります。例えば、アフリカ展示場の「ニヤウ・ヨレンバ(カモシカ)」は、吉田憲司館長のフィールドであるザンビアでの研究成果をもとに館長自身が制作しました。また、わたし自身は共同研究のメンバーの協力を得ながら、日本の文化展示場の大漁旗とカツオの一本釣り用の竿を高知県の漁師に作ってもらいました。いずれも教員がしっかりと現地でフィールドワークを



おこない、その地域の皆さんとよりよい人間関係を築けたからこそ、その収集方法だといえます。基本的には教員が現地から収集することが多いですが、近年では、寄贈が増えています。

示場について紹介した新『国立民族学博物館展示案内』の「テーマで読みとく」や、本誌次号からの新コーナー「みんぱく回遊」もご利用ください。あるテーマについて地域横断的に考えたいという観点から、設定された順路にとらわれない展示の見方を紹介しています。世界各地の文化の類似性・多様性が見えてきます。(本誌編集室)

**Q** 音楽展示ではなぜチャルメラやギターなど特定の楽器ばかり展示したのですか。

**A** ブリュッセル(ベルギー)やフェニックス(アメリカ合衆国)には大規模な楽器博物館があり、世界中の多種多様な楽器が展示されていますが、民博の音楽展示場には、このような網羅的な展示を実現するための十分な広がりはありません。狭い空間で同じような展示をしようとすれば、代表的な楽器だけを並べる無機質な単調な展示になりがちです。

そこで、民博の音楽展示では、担当教員のこれまでの研究成果に基づいて、チャルメラやギターなど四種類の楽器群に焦点を当てて展示することにしました。展示は楽器を軸に構成されていますが、人間と音



音楽展示「ギター——歴史のなかの音」セクション

す。世界中を旅して、さまざまなものを集めた方から、博物館でより多くの人に見てもらいたいという事で寄贈される場合が多いです。もちろんこの際も教員が資料の状態や来歴などを調査し、民博でしっかり活用できると判断した資料を受け入れることとなっています。(民博 日高真吾)

**Q** ナイトミュージアムを開催してほしいです。

**A** ささまざまな施設で実施されているナイトミュージアム。万博公園での夜桜や、イルミネーションを楽しんだ後に、いつもと違う夜のみんぱくを満喫するというのも素敵ですね。しかし、残念ながら、万博記念公園の開園時間との調整や、本館の開館時間を延長した場合の警備、案内等の人員確保が難しいため、現時点ではナイトミュージアムをおこなう予定はありません。とはいえ、とても魅力的なイベントですので、引き続き前向きに検討したいと思っています。(民博 広報係)

**Q** 中央パティオ「未来の遺跡」に入ってみました。

**A** 「未来の遺跡」は、水と石、タイルとアルミカプセルが共存する不思議な空間です。実際になかに入ってみると、インド産の砂岩が用いられた足場は脆く、滑りやすかったり、段差が大きかったりするため、

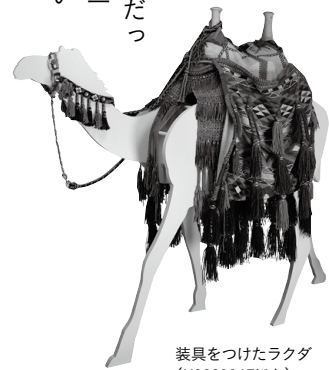


中央パティオ(中庭)を構成する「未来の遺跡」

楽との関係について考えてもらえるように工夫されています。チャルメラ展示とおして、人生の節目に音楽が演奏される理由について、ギター展示とおして、ポピュラー音楽の世界的な広がりや社会変革に音楽が果たす役割などに思いを馳せてもらえれば嬉しく思います。(民博 寺田吉孝)

**Q** 西アジア展示では、ラクダが突然鳴いたり、テントの匂いも強烈で驚きました。博物館なのに五感で楽しめると思いませんか？

**A** 西アジアではラクダは重要な役割をもっています。展示場で聞き慣れないラクダの鳴き声で立ちどまると、そこにはラクダの装身具や振りわけ袋などが展示されています。ラクダや遊牧民の文化を知るきっかけとして鳴き声を採用しました。また、二〇一七年に完了した展示の全面改修では、映像や音声などを積極的に取り入れる方針だったため、その一例ともなっています。



装具をつけたラクダ (H0229047ほか)

一方、ペドウィン(アラブ遊牧民)のテントは黒ヤギの毛を紡いで糸にして、それを使って織っています。ですので、テントの匂いは黒ヤギの毛のものです。みんぱくの標本資料は、殺虫処理などはしますが、それ以外の汚れなどの使用痕を洗ったり、拭きとったりはしません。それ自体も資料の情報としてその

安全性の面から一般のお客様への立ち入りはご遠慮いただいております。「未来の遺跡」は、日の当たり方によって、光と影のコントラストが刻一刻と変化していくため、さまざまな表情を見せてくれます。これからも、「見て」楽しんでいただければ幸いです。(民博 広報係)

**Q** みんぱくで結婚式の撮影をしたいのですが、どのような手続きをすればよいでしょうか。

**A** お二人の門出を祝した記念すべき写真の舞台に、みんぱくをお選びいただき、とても光栄に思います。みんぱくでの前撮りをご希望の場合、開館時間外での対応となりますので、まずは前撮りを依頼された先の担当者様にご相談ください。みんぱくの総務課広報係にご連絡いただくようお願いください。担当者様を通じて、具体的な日時や場所、撮影料金等の調整をさせていただきます。素晴らしい写真が撮れるといいですね。(民博 広報係)

**Q** みんぱくにマスコットキャラクターはいないのですか。

**A** かつて、Dr.みんぱくという幻のキャラクター(一四〇―一五頁参照)が存在していたようですが(本誌キャラクターやゆるキャラは存在しません。ただし、展示場に足を運んでいただければ、どのゆるキャラにも負けないような、ユニークでかわいいうな、生き生きとした表情の仮面や人形。ぜひ自分だけの、お気に入りの一点を見つけてみてください。(民博 広報係)

〇〇してみました世界のフィールド

みんなの顔『月刊みんな』



499冊すべて並べてみました

表紙は、創刊以降発行された499冊をエントランスホールの階段に並べて撮影した

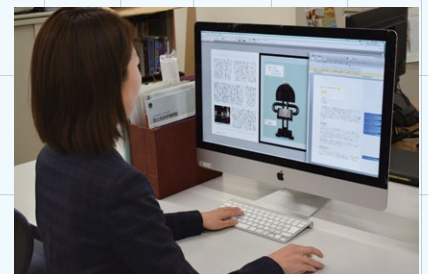
『月刊みんな』はどのように作られているの？  
通巻500号を記念して読者の皆さんの疑問にお答えするとともに、  
今号における制作の裏側を紹介したい。

広報誌はよく、自治体や企業、公共施設といった機関の「顔」といわれる。それらの活動やそこで働く人びとを、一般の方に広く紹介しているからだ。広報誌を見れば、その機関のおよその雰囲気から、今何を考え、次にどう動きだそうとしているかがわかる。だから、広報誌はひとつとして同じものはないし、同じ冊子であっても号によってその「表情」は異なる。みんなの広報誌である本誌も、みんなの「顔」である。一九七七年の創刊以来、読者の皆さんにさまざまな表情を見せてきた。

『月刊みんな』ができるまで

では、本誌がどのように作られているのか簡単に紹介したい。編集委員は本館の教員六名で構成され、その他デザイナーや編集実務をおこなうスタッフが制作を担っている。特集のテーマをはじめ、各号の表紙や誌面構成など、本誌のあらゆる事柄は編集会議を経て決定される。

制作工程は次のような流れだ。はじめに、執筆者を決めて原稿を依頼する。執筆者から原稿が送られてきたら文章をチェックし、写真を選定または館内のスタジオにて撮影。毎月開かれる編集会議にてそれらの内容が精査される。文章表現のみならず、写真や図版についてもこまかいチェックが入る。地図ひとつとっても、どこに国境を引くかで見解がわかれて議論が尽きないこともあった。おのおの異なる研究地域や専門性をもつ研究者で成り立つ編集委員だからこそ多角的に内容を精査でき、公正かつ一般読者に読みやすい誌面作りに努めている点は大きな特徴といえよう。編集会議で挙がった意見や提案をもとに著者校正とレイアウトを進め、編集長の最終確認を経てレイアウトデータを印刷会社に渡す。一週間後、冊子に仕上がった『月刊みんな』



レイアウトソフトを使用して写真や文章を配置していく  
(写真はすべて2019年撮影)



Dr. みんなの現役時代を思い出して懐かしむ久保正敏本館名誉教授。  
14ページに掲載した写真を撮影した日の一枚

時の資料(二ページ写真参照)を初めて目にしたことだ。何度も更新を重ねた編集会議の資料。赤字でこまかく指示が書き込まれた指定紙。パソコンのない時代、すべて手書きのせい、そのときの制作現場がリアルに想像できた。みんな設立を目前に控え、一から広報誌を作るのはとても労力いるものだったと推察できるが、そこから始まった本誌の歴史が今日まで

ばく』を手にしたときが、ようやくほっと一息つける瞬間である。梅棹忠夫初代館長は、本誌をみんなの広報誌であると同時に「一般市民むけ学術ジャーナリズム」と位置づけていた。ここが他の企業や公共施設の広報誌と異なるところだ。制作に携わるうえで求められるのは、民族学・文化人類学への深い知識と社会に対する広い視野であろう。わたしたちは日々、収蔵資料を見る機会も教員や研究者との接点も多い。そのためみんなのモノにもコトにもおのずと詳しくなり、「みんなは知れば知るほどおもしろい」と感じる場面が多々ある。それを体感しているわたしたちだからこそ、みんなはくや、ひいては民族学・文化人類学の魅力を今度は読者の皆さんに伝えていきたい。

回顧とあらたな発見

五〇〇号の準備は約一年前から進めてきた。この節目をどのように飾るのか、特に執筆者の選定や特集の企画に頭を悩ませた。『月刊みんな』のあゆみを特集でどう表現しようか。議論を重ねた結果、年表とともに変遷を振り返ることとした。これまで歴代編集長の座談会や寄稿といった形式はあっても、今回のように、『月刊みんな』自体が主役になってその足跡をたどるのは初めての試みだった。バックナンバーや関連資料の通覧に時間を費やす日々が続く、なかでも三〇〇巻を迎えた際の記念号(二〇〇六年二月号)は創刊から三〇〇年間の出来事を調べる際にとても重宝した。また、資料ではわからない情報については当時の編集長に取材をしてまとめあげた。



500号に至るまでの執筆者数や総ページ数など、本誌にまつわる数字をデザインした表紙案。今回、惜しくも採用にはならなかった

案の定、歴史をたどる作業は容易ではなかったが、こういう機会だからこそ知り得たこともたくさんあった。そのひとつが、創刊当

五〇〇号は通過点

現在、本誌はバックナンバーを含め最新号まで、本館の「探究ひろば」で閲覧できる。展示を閲覧される方には気軽に立ち寄っていただきたい。また、ホームページには二〇〇五年四月号以降の誌面(最新号は発行翌月に公開)が掲載されているほか、視覚障害者の方にも読んでいただけるよう音訳の公開も進行中だ。以前よりも皆さんにとって読みやすい環境が整ってきている。本誌は五〇〇号という大きな節目を迎えたが通過点にすぎない。今月はどんな「表情」を見せてくれるのか。読者の皆さんには、そんな期待を抱きながら手にとってもらえるような『月刊みんな』を、これからも届けていきたい。(本誌編集室内藤美咲)

観覧料改定のお知らせ

2019年6月6日(木)より、本館展示観覧料を左記のとおり改定いたします。なお、特別展観覧料はその都度、別に定めます。何卒、お願い申し上げます。

◆2019年6月4日(火)まで

一般	高校・大学生	中学生以下
420円	250円	無料

◆2019年6月6日(木)から

一般	大学生	高校生以下
580円	250円	無料

各種割引等につきましては、みんなくホームページをご覧ください。

特別展 「子ども／おもちゃの博覧会」

明治時代以降における日本の社会の大きな変化は、その時々の子どものありようや人びとの子ども観に影響を与えました。本展では、江戸時代から戦後のさまざまな玩具をつづいて、子どもや子どもをめぐる社会の変遷とその意味を探ります。

会期 5月28日(火)まで  
会場 特別展示室

■関連イベント  
特別展関連ワークショップ

「折り紙教室」紙芝居「石けりであそぼー」の3種類のワークショップをおとして、昔の遊びを体験いただけます。  
日時 各日11時30分〜12時、13時〜13時30分、14時30分〜15時(各回30分)  
開催日につきましては、みんなくホームページをご覧ください。

企画展

「旅する楽器——南アジア、弦の響き」

南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられました。楽器が広大な地域を旅して伝播していく様を知ることで、ユーラシアにおける長期的な文化交流を実感してください。

会期 5月7日(火)まで  
会場 本館企画展示場

企画展

「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

片倉もとこ(本館名誉教授)が半世紀前に撮影した写真を手がかりに、色鮮やかな物質文化からサウジ女性の生活文化の変遷をたどりま。

会期 6月6日(木)〜9月10日(火)  
会場 本館企画展示場

音楽の祭日2019 in みんなく

1982年にフランスで、夏まの日にみんなくで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまり

みんなくセミナー  
日時 5月18日(土)13時30分〜15時(13時開場)  
会場 本館セミナー室  
参加費 無料  
※参加券を当日12時30分から本館1階案内所前にて配布  
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内いたします。

第491回  
文化遺産の持続的な活用をめざして  
——南米ペルー北高地パコパンバ遺跡での試み——  
講師 関雄(本館 教授)  
南米アンデス文明初期の巨大な神殿遺跡パコパンバの調査は、13年にもおよびます。現在、住民とともに実施している、文化遺産の持続的な活用を目指す活動を紹介します。



パコパンバ遺跡の保存作業に携わる地域住民

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなくへの展示資料」について分かりやすくお話します。

5月12日(日)14時30分〜15時 本館ナビひろば  
新ビデオテク紹介  
「ただいまオンエア」

——ソニック・ティアスポラをつなぐ地域ラジオ——  
話者 三島禎子(本館 准教授)

5月19日(日)14時30分〜15時 本館ナビひろば  
アーミッシュキルトの誕生  
——米国のエスニックグループの交流史から

話者 鈴木七美(本館 教授)  
5月26日(日)14時30分〜15時 本館ナビひろば  
アンデスの悪魔の踊り  
話者 八木百合子(本館 助教)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

ました。みんなくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。

日時 6月23日(日)10時15分〜16時35分  
(10時開場)  
会場 特別展示室

※申込不要、参加無料(展示をご覧くださいになる方は、展示観覧券が必要です。)

お問い合わせ先  
企画課「音楽の祭日」担当  
電話 06-6878-8210  
(土日祝を除く9時〜16時)

みんなく映画会 第45回ワールドシネマ

「サミーの血」

独自の言語と文化を持つサミー人の少女が、国の分離政策によって差別的な扱いを受け、自らのルーツと葛藤しながら成長し生きる姿をおとして、民族のアイデンティティについて考えたいと思います。

日時 6月16日(日)13時30分〜16時30分  
(13時開場)

会場 特別展示室(定員350名)  
※申込不要、要展示観覧券  
※参加券を当日11時から特別展示室入口にて配布

●みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール万博記念公園駅とみんなくの間の直通送迎バスを特別展「子ども／おもちゃの博覧会」の会期中に運行します。

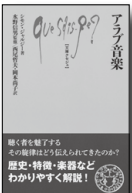
運行日 5月28日(火)までの土曜・日曜・祝日  
1日11往復、所要時間10分、無料  
運休日 平日、5月1日(水・祝)

※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。



■櫻永 真佐夫 著  
『隙り合いの文化史』  
左右社 3,700円(税別)

「隙り合い」が孕むすべてのものを、ホクサーにして人類学者の著者が暴く前人未到の文化史。名誉と屈辱、理性と本能など人間の本性に迫る章から「ウルトラマンはなぜ隙らないのか」といった雑学まで、暴力論とは異なる視点から「隙り合う」ことの本質を描いた(怪)力作。



■シモン・ジャルジー 著、水野 信男 監修、西尾 哲夫、岡本 尚子 翻訳  
『アラブ音楽』  
白水社 1,200円(税別)

中東・北アフリカを舞台に育まれてきた音文化のなかでも、音楽に焦点をしぼり、歴史、特徴、楽器などについてわかりやすく解説。西洋音楽とアラブ音楽の双方に造詣の深い著者が、ヨーロッパ・キリスト教世界とアラブ・イスラム世界の接点という特殊な立ち位置から、アラブ音楽へのアプローチを試みる。



刊行物紹介  
■ロブ・フラワーズ 著、八木 百合子 監訳、北川 玲 翻訳  
『世界一おもしろいお祭りの本』  
創元社 2,000円(税別)

世界には、古くから伝わる不思議なお祭りがたくさんある。本書では、その地方以外ではほとんど知られていない世界の40のお祭りにスポットを当て、そのユニークな衣装や儀式をカラフルで紹介する。

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)  
※会員無料(会員証提示)、一般500円

第488回 5月4日(土)祝13時30分〜14時40分  
「特別展子ども／おもちゃの博覧会関連」

紙人形と着せ替え遊び——遊ぶ身体記憶

講師 森下みさ子(白百合女子大学 教授)

第489回 6月1日(土)13時30分〜14時40分  
「陽気な墓」をとおして考える生と死

講師 新免光比呂(本館 准教授)

ルーマニアのマラムレシュ地方には、陽気な墓と呼ばれる墓地があります。色とりどりの墓標が並ぶ姿は墓地の陰気なイメージを払拭します。しかし、死が陽気なものであるはずがありません。あえて陽気な墓標で死者を想起しているのはなぜでしょうか。生と死の間の受容であり、死は永遠の休息だからでしょうか。人により、民族により、時代により死の表象は異なります。しばし死への想いを抱いて西欧文化を旅してみましょ。

東京講演会

第126回 7月13日(土)13時30分〜14時40分  
「みんなく名誉教授シリーズ」

チワン(壮)族の文化の資源化の現状

講師 塚田誠之(本館 名誉教授)  
会場 モンペル御徒町店4Fサロン(定員60名)

チワン(壮)族は、中国の55の少数民族のうち最大の人口を有し、その多くが中国南部の広西壮族自治区に居住しています。歴史的に漢文化の影響を受容してきましたが、歌掛けやモチ米食品への嗜好性など独自性を保持してきました。1990年代以降、中国の経済発展にもない、かつて男女の歌掛けの際に用いられた「織球」が商品化され、高床式住居が観光資源として活用されるなどの変化がみられます。本講演では、こうした事例をどうして文化の資源化について考えます。

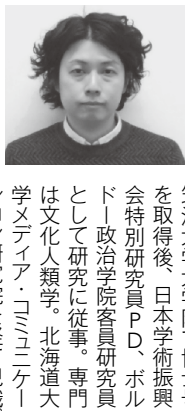
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般500円

国立民族学博物館・国立科学博物館  
共同企画展  
「自然をつなぐ、世界をつなぐ」  
会期 6月16日(日)まで  
会場 国立科学博物館日本館1階  
企画展示室(東京・上野)  
休館日 月曜日、5月7日(火)  
「ただし、5月6日(月)・休館」  
6月10日(月)は開館  
主催 国立科学博物館  
国立民族学博物館

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時〜17時(土日祝を除く)です。

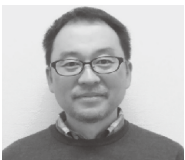
研究部新メンバー

奈良 雅史 准教授(超域グローバル科学研究部)



筑波大学大学院で博士号を取得後、日本学術振興会特別研究員P.D.、ポンドー政治学院客員研究員として研究に従事。専門は文化人類学。北海道大学メディア・コミュニケーション研究科を経て現職。

小野 林太郎 准教授(人類文明話研究部)



上智大学大学院で博士号を取得後、総合地球環境学研究所、オーストラリア国立大学で研究に従事。その後、東海大学海洋学部を経て現職。専門は東南アジアやオセアニアの海域世界における人類の移住史や海洋・島嶼適応に関する研究。





名称 | 人型の Dr. みんぱく

サイズ | 高さ 154cm

腰に腕を当てたスタイル、顔の形のディスプレイ、頭にはバンダナを巻いて人間らしい姿に成形されている

想像界の生物相

Dr. みんぱく

民博 名誉教授 久保 正敏



近年、AI（人工知能）を使うロボットが多数家庭に出現している。イヌ型や人型のはペット代わりの癒やし効果があるし、IT機器とのインターフェースとしても活用される。しかし、何といても日本における元祖は、手塚治虫の創造した鉄腕アトムだろう。

われわれ団塊の世代は、手塚治虫のマンガを読んで育った。SF、少女もの、青年もの、歴史もの、民俗もの、多様な作品群をとおして豊かな感性を育んだ。なかでも『鉄腕アトム』は、捨て子で孤児という出自の彼が、人間不信に陥り、ついには人間に敵対する、という展開を見せ、読者は仰天するとともに、アトムの生い立ちに共感し彼の悲しみに涙したものだ。

◆◆人間との距離◆◆

SF作家アイザック・アシモフが打ち立てた人間に従順たるべしという「ロボット三原則」に反して人間を支配下に置こうとするロボットへの不安は、多くのSF映画で繰り返し描かれてきた。その不安はフランクシユタイン・コンプレックス、すなわち、フランクシユタイン博士がいだいた、自分が創造した怪物に滅ぼされるといふ潜在的な恐れに基づいているようだ。しかし日本では、一九八〇年代から工場に導入した産業用ロボットを擬人化して愛称を付け

たように、ロボットを敵対視しない伝統があるというが、それは、人間に近い鉄腕アトムの存在があったからだろう。

想像界の生物には、不思議なもの、超自然的なもの、未知の世界の恐ろしいもの、人間が憧れる完全無欠なもの、人間の弱さや醜さを投影したものなどがありそうだが、鉄腕アトムも、それらすべてを具現化した存在なのかもしれない。

◆◆みんぱくのロボット◆◆

ここで紹介するのは「ものの広場」の主役だった「Dr.みんぱく」。当時の佐々木高明館長は、一九九三年に新設が認められた第七展示棟（現在の言語展示場、企画展示場、南アジア展示場のあたり）に情報展示を導入すべしと提言、検討されたさまざまなアイデアのなかから、「ものの広場」と「映像の広場」が一九九六年秋にオープンした。ともに実験展示であり、また使用機器の耐用年限を越えたため、前者は二〇〇五年、後者は二〇〇二年に姿を消した。「ものの広場」は、六台の長机に五二種類のモノが、壁際の書架三台には四二種類の各国小学校低学年向け教科書が配置され、机の周囲に置かれた人型端末（右写真）一一台と壁際に置かれた秤型端末三台は、ともに「Dr.みんぱく」と名づけられた。観覧者がモノや教科書をもってDr.みんぱくのセンサーに



工場の倉庫や作業場の雰囲気模した「ものの広場」。壁際に並ぶ教科書のあいだには、秤型のDr.みんぱくの姿も見える（1996年）

かざすと、それらに装着された感応型チップの記憶する識別番号が感知され、モノの名前や用途などの背景情報がDr.みんぱくの画面に提示されるほか、秤型端末は教科書を現地語で読みあげると同時にその和訳を逐次画面に表示する機能ももっていた。「ものの広場」は、視覚に偏重した博物館展示を見直して、触覚から始まるモノとの触れ合いを回復しようとする、新しい展示として企図されたものである。

この感応型チップは一九九〇年代に開発されたばかりの製品で、長さ二センチ、直径五ミリほどの大きな筒形だったが、その後、小型化したICタグや非接触ICカードへと進化した。IT機器の進化にともない、いずれ展示場にも、もっと人間味のあるロボットが出現するかも知れない。

近年、博物館・美術館でも積極的にユニバーサルデザインをとり入れていくこととする動きが見られる。一方で、多くの課題があることにも目を背けることはできない。本コーナー最終回にあたり、博物館が目指す未来について、ユニバーサル・ミュージアムという視点から考えてみたい。

### 感覚の多様性が尊重される博物館

ユニバーサル・ミュージアム(以下、UMと略記)とは、「誰もが楽しめる博物館」を意味する。単なるバリアフリー、障害者対応というレベルを脱して、あらゆる普遍性を模索するのがUM運動の要諦である。一九九〇年代以降、日本においてユニバーサルデザインの考え方が各方面で導入されるようになった。ユニ

バーサルデザインの博物館という含意でUMが注目され始めるのは、二世紀に入ってからである。

最近、僕はUMを定義する表現として、「感覚の多様性が尊重される五月蠅い博物館」を用いている。古今東西、博物館の展示は見ること、見せることを前提として構成されてきた。ミュージアムとは、視覚優位の近代文明の家徴ともいえる。視覚



2015年に民博で開催されたUMシンポジウムのチラシ。表面には点字も印刷されている

中心の展示方法、教育プログラムのある方、問い直し、さまざまな感覚を活用できる博物館を創ろう。そして、博物館から社会を変えていこう。UM運動は、近代に対する強烈な異議申し立てを内包している。

従来、博物館・美術館は静かに見学する場所と

### 誰もが働きやすい博物館

これまでに民博では、UMをテーマとする公開シンポジウムを三回実施してきた。また、二〇二二年には本館展示の全面改修の一環でインフォメーション・ゾーンに「世界をさわる」コーナーも開設された。このコーナーは、民博のUM研究の拠点と位置づけることができる。UMが日本の博物館を改変する起爆剤となっているのは間違いない。今後は日本発の新概念として、UMを国際的に普及するのが大きな目標となるだろう。そのUM運動のなかで、喫緊の課題となっているのが雇用・就労問題である。

「視覚障害学生の博物館実習を受け入れてくれる施設がない」「弱視者の博物館実習を拒否するのは障害者差別ではないか」。僕のところにもういった相談が二件、二〇一八年度中にもち込まれた。現在、障害のある学生が学芸員資格を取得することには制度的に認められている。だが、繊細な資料の取り扱い、照明器具の微妙な調整などの実習では、視覚障害者には「できない」ことが多い。二〇一六年施行の障害者差別解消法では、「できない」を解消するのが合理的配慮とされているが、何が合理的で、どこまで配慮すればいいのかわからない。曖昧である。例えば、視覚障害学生

のために補助員を提供するとしても、その補助の内容は慎重に考える必要があるし、専門的な知識・技術をもつスタッフの養成は簡単ではない。

僕の知人の全盲者は、学生時代、ある博物館で実習を経験した。実習を通じて彼は、博物館の業務遂行上、視覚が必須であることを感じ、学芸員になる夢をあきらめた。あれから二〇年ほどが過ぎたが、基本的に状況は今日も同じである。ちなみに、彼は今、高



筆者は2014年度から東海大学の博物館実習を担当している。実習では、学芸員の資格取得をめざす学生たちに触覚と聴覚による情報収集・伝達の可能性を実験してもらった。民族楽器や仮面に直接触れて触覚や形状を確かめる実習は、全盲の講師ならではの試みといえよう(2019年撮影)



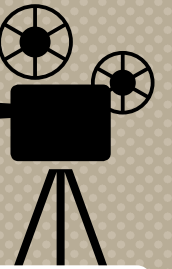
民博の「世界をさわる」コーナー。さまざまな地域、素材の民族資料に優しく、ゆっくりさわること、来場者は「触文化」の豊かさを体感できる

校の英語教員となつて活躍している。

さまざまな障害者が学芸員として採用されることにより、博物館そのものが変化する。これは、障害当事者として博物館に勤務する僕の信念である。学芸員実習も柔軟に運用され、万人に開かれるべきだろう。しかし、多くの博物館では「雑芸員」と揶揄される少数の学芸員が日々の雑務をこなしながら、展示や教育プログラムを企画・担当しているのが現実である。そういった館が、配慮を要する実習生を受け入れるのは厳しい。日本の博物館で障害者が学芸員採用される例はきわめて少なく、おそらく視覚障害者の学芸員は皆無だろう。

お互いが「できる」ことを分担するのが障害者雇用を進める鉄則である。とはいえ、昨年発覚した省庁等の公的機関における障害者雇用増し問題を想起するまでもなく、「障害者にもできること」を見つめるのみでは現状打破は難しい。障害者雇用の進展を図るには、「障害者だからこそのできること」を探究する発想が不可欠だろう。

感覚の多様性が尊重される五月蠅い博物館。この理想が雇用・就労という面で博物館に根付くまでに時間がかかるのは確かである。だが、「障害」という観点で学芸員の仕事を再解釈再検討することは大切だろう。UMとは「誰もが働きやすい博物館」である。そう言える日がきつとやってくることを僕は信じている。



## 劇映画のなかの万博

飯田卓  
民博人類文明誌研究部

もうひとつの万博映画

二〇二五年に、大阪市此花区このはなくの夢洲ゆめしまで、日本の国際博覧会としては二〇年ぶりの大阪・関西万博が開かれる。いっぽうで、一九七〇年には、みんぱくの所在する万博記念公園の敷地で、日本で最初かつ最大の国際博覧会、大阪万博（日本万国博覧会）が開かれた。今から六年後の万博は、四十九年前の万博から何を継承し、何をあらたな挑戦と位置づけていくのか。万博をたんなる祭典に終わらせないためには、われわれ一人ひとりがこれから考えていく必要がある。大阪や日本に住んで万博のホストともいえるわれわれは、オリンピックでいえば選手にもあたるからだ。

このことを考えていくうえで、「公式長編記録映画 日本万国博」（谷口千吉監督、一九七二年）という映画はたいへん参考になるが、公式記録であるため、レンズの視野が万博会場の外にまで届くことはなく、同時代が抱えていた課題とのかかわりで万博を考察するには不十分だろう。そこで今回とりあげたいのは、第一作公開から今年で五〇年を迎える「男はつらいよ」の山田洋次が監督を務めた「家族」という映画である。

この映画は、「男はつらいよ」公開の翌年にあたる一九七〇年に、大阪万博の会場をロケ地のひとつとして撮影され、同じ年の二〇月に公開された。公開はもちろん、大めようとす妻に対して、夫は、独りででも新天地を開拓したいと告げる。結局、妻も夫を信頼し、二人の子どもを抱えてついでいくことになる。カメラは、主人公らの足取りを長崎県から北海道まで辿っているにすぎない。しかし、見知らぬ町とおりながら思わぬハプニングを経験し、将来に対しても不安を募らせながら歩みを進めていく主人公らを見て、観客は、主人公の不安とみずからが時代に対してもつ不安とを重ね合わせていく。

「男はつらいよ」をものした山田洋次ならば、この不安をもつと楽天的に描くこともできただろう。実際、映画の終わりでは、希望とともに新生活を営む主人公らのようすが描かれている。しかし、映画全体をとおして、観客は手に汗を握りながら事態の推移を見つめることになる。大都市における地下街や雑踏の魅力、ならびに工業地帯における巨大な工業技術を映像としては見せながら、目に見えにくい人の心のゆく末を問いかけるようなスタンスが、この映画からはつきりと感じられる。

### 万博と観光ブーム

このことをよく表現しているのが、笠智衆が演じる主人公の父親である。この老人は最初、福山に住む主人公の



大阪万博開催当時のにぎわい（撮影：野口昭雄）

阪万博が閉幕した九月一三日よりも後のことだが、閉幕直後ともいえる時期に映画を公開したのは、万博の記憶が鮮明なときにこそ映画で万博について問いかける意図があつたためではなかろうか。いわく、万博とは何だったのか、そして、それがテーマとした「人類の進歩と調和」とは何だったのかと。

### 新生活への不安と新時代への不安

石炭燃料から石油燃料への転換が進みつつあつたこの時期、産出量が減っていたであろう長崎の炭鉱に勤めていた主人公は、一念発起して北海道での酪農経営を志す。もちろん、まだ行ったことのない土地である。それを止める世話になるつもりで主人公らとともに長崎を出るが、「東京物語」（小津安二郎監督、一九五三年）で笠が演じた老人と同様、厄介者扱いされて追いはられることになる。追いはらった弟自身、負い目を感じて兄に高額の餞別を渡すものの、まさしく家族のありかたがここで観客に問われる。主人公らは、新生活への不安と新時代への不安を共振させながら、導かれるように歩みを進めていく。

山田の「家族」は、小津の「東京物語」の基調を受けただけの小津映画と異なっているようだ。例えば、「東京物語」は尾道と東京が舞台であるのに対し、「家族」は長崎、福山、大阪、東京、青森、北海道へと舞台が変わっていく。後者におけるロードムービーの展開は、国鉄が主導した観光ブームが定着した時代だからこそ採りえた手法だと思ふ。

また、万博会場をはじめとして大阪の地下街や東京の満員電車、瀬戸内コンピナートなどの都市的情景を意識的に描写する点も、山田映画の特徴であり、スタジオでの演出を重視する小津映画と大きく異なる。小津の時代には、視覚的に迫力のあるモチーフが山田の時代ほど多くなかつたからだろう。「東京物語」の撮影時、東京タワーすらまだなかつたのだ。

山田の描いた当時の情景は、人類がそれまで経験したことがない巨大技術や大衆生活を反映しており、万博はその一例である。梅棹忠夫や岡本太郎のいいかたを借りれば、「へらばつなもの」の等身大の経験を、山田は複眼的に描いた。次の万博はわれわれにどのような経験をもたらすのか、山田を見習って今から考えておきたいものだ。

## 「家族」

1970年／日本／日本語／106分／DVDあり

監督：山田洋次

出演：倍賞千恵子、井川比佐志、笠智衆ほか

『家族』（1970年）  
監督/山田洋次  
写真提供/松竹



## What's in a name?

よし おかのほる  
吉岡 乾 民博 人類基礎理論研究部

山田太郎さんをご存知だろうか。山田花子さんでも構わない。

残念ながら筆者の狭い交友関係では、知人・友人とよべる人「覓にそういった名前の方は存在していない。けれども、誰もが見知っている名前かと思う。何故ならば、一昔前のお役所関係の書類の見本を、この二人が全国津々浦々まで出向いて書いて下さっていたからだ。何という努力か。近年では、郵政太郎とか、国税太郎とか、続々と各家庭から太郎さんが参入してきていて、記入例業界も濡れ手に粟と賑わっている。

ジョン・スミスさんも同じ動機、つまり、一般的にありふれていると思われる、必ずしも統計に基づかないイメージを先行させて「一般人」として創作された人物に名付けられる名称として、有名である。もはやその名前は、名無しの権兵衛さんとしての役回りから逸脱して、フィクション作品のなかでの「わたしは偽名です」というこっそりとした主張にまでなってしまう。何かの作品にジョン・スミスが出てきたらそれと解る人はすぐに感付けるし、解らない人にも悪影響がおよばないという仕掛けだ。匿名という意味では、かつて、有名イラストレーターが「山田太郎(仮)」というペンネームで漫画を描いていた、なんて話もあった。ご丁寧に「仮」まで付いている。

パソコン通信後の、インターネット黎明期に、ネット掲示板というのが流行った。メッセージ入力フォームには名前とメールアドレスとを書き込む欄も用意され

ているのがお決まりの形だったが、多くの利用者が匿名で発言していた。名前を入力しないと「名無しさん」といった代わりの名前が自動的に出力され、多数の名無しさんが好き勝手に玉石混濁な議論をし、発言の真实性や責任の所在は、すべて藪のなかであった。ウェブ掲示板はすっかり衰退しているが、匿名発信の文化はSNSへと土俵を変えて、今でも続いている。

中国でも張三李四(張さんの第三子、李さんの第四子)といえは、凡百の特段目立つことのない一般市民のような意味になる。悪目立ちしないのは生きるうえで大切なことでもあり、子どもに良い名前を付けるとその目立つ子を魔物が攫ってしまうからと、悪い意味の名前を付けたり、「名無し」という名前にしたりする文化は、世界中で散見される。なるほど、ウェブ掲示板でも、己が苛烈な発言への反感から身を守るため、「名無し」の名前が隠れ蓑にされていた。この場合はどちらが魔物だが、一概にいえない話ではあるが。

知人に山田太郎さんも山田花子さんもジョン・スミスさんも居ないが、調査しているフィールドには、ムハンマド・アリーさんが四人も居る。ムハンマドの最後にして最高の預言者の名だし、アリーも彼の従弟であり第四代正統カリフの名なのだから、かぶつてしかりの名なのではあるが。そうなると父親名とか、村名とかで何とか区別をしていくしかない。それでもダメなら、綽名を付けるしかない。そういえば、ボクシングでも同名のアメリカ人選手が居たなあ。

## 編集後記

『月刊みんぱく』は1977年に創刊され、本館と歩みをともしながら毎月1冊休みなく刊行されてきた。本号では通巻500号を記念した特集を組んだ。500号と数字を述べてもイメージがわからないかもしれないが、全号を縦に並べると128.5メートル、重さをはかると約28キログラム、床に上げると約23.39平方メートルにもなるという。全巻を並べて撮影した本号の表紙からもその物理的な量が想像できよう。これまで編集にかかわってきた人は、編集長18人、執筆者になると約1800人にもなる。編集委員は、奥付で確認できるだけでも69名になる。そうした歴代関係者の末席を汚しながら、500号という節目に編集長をさせていただき、誠に光栄である。次の600号、700号、さらにその先に向けてバトンを渡していけたらと思う。

なお今号の特集は、本誌の編集実務を担当している編集室のスタッフに原稿を執筆してもらった。いずれも創刊以来、本誌の制作に協力をいただいている千里文化財団に所属する方々である。2019年4月号で特集を組んだ収蔵庫同様、裏方とみなされがちであるが、彼らの活躍も紹介できていたらと思う。(丹羽典生)

●表紙：本館の中央階段に並べた499冊の『月刊みんぱく』  
(撮影：本誌編集室)

## 次号の予告

特集

## 「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」 (仮)

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



## 月刊みんぱく 2019年5月号

第43巻第5号通巻第500号 2019年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子  
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子  
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 株式会社 遊文舎

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りにください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

